

---

## 第九話

### 将門純友契約事

『前太平記』上 卷第二 三十四頁から三十七頁より

---

#### [純友謀反]

さてここに、伊予掾藤原純友は山陽・西海・南海の三道の海賊を集め、自分こそがその頭として、伊予国日振島の沖に、千艘余りの船を捕らえて調べ、海上往来の

我身其張本として、

官物を奪い取り、その他の家々の私財家財を残らず奪う。国中この所業に悩まされ、一人として、住まいで安心できない。とつくの前から東国では、将門が猛威

一人として居を安んぜず。

をふるい、暴虐は凄まじいものだ。これこそ、希代の珍事であると思ったが、またしても西海でこのような賊の群れが発生すること、これは一体、どのような世の中だと、民草は安心して生活できないのだった。

民手足を措くに所無し。

#### [比叡山盟約]

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

さて、今東国西海同時にどよめいており、その理由を辿ってみると一昨年の承平二年純友が在京の時に比叡山に参拝した。平将門も同じくして入山したところ、根本中堂(壹)の前で遭遇し互いに喜び数刻の間とりとめのない会話を楽しみ、食籠(貳)や破子(参)などを取り出し酒盛りをして盛り上がったが、どのように思ったのだろうか将門は遙か平安京を見下ろして、しばらく何も言う事なく座っていた。純友は不

将門遙かに平安城を見下ろして、 稍暫く物をも言はず居たりける。

思議に思い、その理由を聞いた。将門がそれに答えて言ったことには、「まったく、この平安京が都であることは、桓武天皇が延暦十二年に、大納言である藤原小黒麻呂と、左大弁古佐美、そして、僧の賢憬たちに命じて、諸国を調査させて、山城国の葛野郡宇太村の地を占って、遷都なされる。翌年十月、新しい都の内裏は全て完成する。そこで名付けて、平安京と名乗ることとする。本当に山川土地は立派なので、四方の道は便が良く、左に青龍、右に白虎、前に朱雀、後ろに玄武、四神がおわすに相応しい神聖な土地であり、皇室が百代に渡っても、不変となるであ

四神相応の靈地、 百王不易の鳳城なり。

ろう都である。そうして、桓武天皇の御位を長子安殿にお譲りになってから、皇室は長く続いて、位に即きなさる。つまり、平城天皇・嵯峨天皇・淳和天皇である。だから、私の祖父である葛原親王は同じく桓武天皇の息子であったが、一人だけ例外的に即位しなかった。それゆえに、不幸と言える。私は、もったいなくも、その

子孫として生まれるも、召使いの勅命さえも認められず、奴婢や僮僕のように身を落とすことが、怒りに日々胸が締め付けられている。このことは、もはや失礼なこと

事既に 卒爾の様に候へども、

とですが、わずかばかり決心する次第でございます。どうか仲間になってはくださ

聊か思ひ立つ事の候。

如何与し給ひてんや」

らないか」と、申し上げたところ、元々、凄まじく欲深い荒くれ者であるので、少

元来純友欲心熾盛の無骨者なれば、

しも考え込む様子もなく、「お言葉はごもつとも思います。本当に桓武天皇の正

稍思案の躰もなく、

「御詮尤もに覚へ候。

統でいらっしゃるので、帝位に即位なさることは何の問題がございましょうか。素

何条の事か候べき。

早くご決心なさいますように」と、何事もないように申し上げた。将門はたいそう

はや思し召し立ち給へ」

喜び、「重大な願い出を恐れ多くも申し出し、その上素早い承諾、めでたきこと、

「大儀の所望賢くも申し出し、

殊に早速の領掌、

これに勝る物はないことなかりょうと思います。貴殿は房前の三男の真楯の後胤とし

祝着之に過ぐべからず覚へ候。

て藤原氏の嫡流であるので、私が即位すれば、きっと貴方を関白とし、天下の政をお任せ申し上げます。なので、まず私は東国に下り、大軍を率いて、すぐに上洛さ

万機の政を預け申さん。 不日に上洛せしむべし。

せよう。純友は伊予に下り、その用意をしておいてください」と、堅く約束して東西に別れた。

### **[純友海賊の首領を捕らう]**

それから、純友は故郷へ下るといって、尼崎から纜をほどいて、翌日の暮れ方に播磨の洞窟に到着した。夜になって、急に風が変わり、海上は波が荒々しくなる。このために、とある磯のほとりに碇を下ろし、風が収まるのを待ち受けるが、純友を筆頭として、郎従どもは皆船に揺られて、前後不覚となって、眠りについた。そのころ、山陽・南海には海賊が多く、のさばり、海上を行く貸し船を奪い取るという悪行が(頻発し)、常識からかけ離れている。船そのものが多いため、商人船と思っ

常編に絶へたり。(肆)

たのだろうか。純友の船に海賊二三十人が乗り移り、船の部屋の中に乱入し、金銀衣装は言うに及ばず、旅の準備品である手道具すらも残ることなく盗み取り、自分の船に運んで行ったのだった。この時、純友が大切に持っていて、いつも肌身離さず持っ

爰に 純友が秘蔵して、常に傍をも放たずして持ちたりし、

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

ていた「藤丸」という鎧がある。枕元に置いてあったのを知らないでいたのだろう

藤丸と云ふ鎧あり。

か。これの入る唐櫃を盗まなかった。ところが、賊徒の頭領と思われる男が言ったことには、「あの唐櫃が普通のものより重たそうに見えるのは、まさか武器とかで

「唐櫃の常ならず重げに見ゆるは、よも物の具ばかりにては非じ。

はあるまいな。さあ、引き返して、あれを奪って、俺の分け前の一つの設けにしよ

いざ立ち帰り是を取つて、我が一分の所得にせん

うではないか」と、たった二人で引き返し、例の唐櫃を探したのだった。灯りは部屋に入るギリギリ前に消した。どこにあるとも分からない。あちらこちらと探した

燈は最前に消しつ。

が、運の尽きであったのだろうか。純友の枕にがばつと躓き、前のめりに倒れたのだった。純友はこの音に驚き、状況を理解した途端に起き上がり、むんずと掴みもみあったが、賊は二人、純友は一人で、相手をするのが難しいと思って、「強盗を

賊は二人純友は一人にて、会釈い兼ねて、  
「強盗

押さえ込んだぞ。起きろ野郎共、立ち向かえ若衆共」と、呼ばれる声に慌てふため

組み留めたり。起きよ者共、  
落ち合へ若者

き、郎従も若衆も折り重なって、二人の賊共を捕まえてしまった。そして、火を灯し、部屋の中から始めて、船の中を見回すと、たいそう大勢で盗み取ったものだと思われて、道具一つもなかったのだった。純友はたいへん怒って、「さては貴様ら二人だけではなかろうなあ。他の郎党がたくさんいると分かる。わが故郷に連れ帰り、悪事を問いただしてやろう」と、いっそう強く縛って、伊予国へと帰ったのだ

糺明を遂ぐべし」

った。

---

## 注釈

※壺・根本中堂……比叡山延暦寺の中心になる堂。東塔にある。

※式・食籠……食物を入れる容器。多くは蓋があって形は丸い。

※参・破子……ヒノキの薄い白木で折箱のように造り、内部に仕切りを設けた弁当箱。

※肆・常編に絶へたり……太平記（27）「師直師泰過分の奢侈身に余りてたちまち主従の礼を乱れる。末代と言ひながら、事常篇に絶へたり」

---

今後の動乱の中心となる将門と純友の邂逅でした。第五話にて、鹿は春日大明神の使いであり、藤原氏の守護神であると述べましたが、その際鹿が悪さをしたことにより、人々が危惧したとある一族の反乱とは藤原の姓を持つ純友のことであったと今回でわかります。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

将門がかっこよくてたまりません……。感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m( )m

公開：2015/5/27

改訂：2021/3  
海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※